曽野綾子をめぐる覚え書き
―「星と魚の恋物語」「甘酸っぱい部屋」のことなど―

黒　澤　亜里子

曽野綾子の小説に「星と魚の恋物語」（1970）という短編がある。最近この短編を再読する機会があり、改めて興味深い発見があった。この機会にそのいくつかを書き留めておきたい。

この短編は、曽野のいわゆる沖縄戦三部作「生贄の島」（1969）、「切り取られた時間」（1971）、「ある神話の背景」（1971 - 72）とほぼ同時期に書かれた小説だが、これら三部作、とりわけ「ある神話の背景」をめぐる一連の裁判闘争の陰で忘れられた存在と言ってよい。

「星と魚の恋物語」（以下「星と魚」と略記）自体は、沖縄の少年と本土の令嬢の不釣り合いな恋の顛末を描いたありふれた小説である。しかし、ここに復帰前後の沖縄の社会状況に対する曽野の反感ないしは悪意が、「星と魚」という暗喩を用いたある種のダークファンタジーとして仕組まれていたとすれば、また別の興味が湧いてくる。

本稿の目的は、本作やその他の周辺テクストをふくむ曽野の沖縄関連作品を、広義の「宗教小説群」という視点から読み直すこと。そして、そこで曽野的なカトリシズムが「沖縄戦」における〈他者〉の経験や記憶とどのように交渉 / 闘争し、どのように破綻したのか、という「失敗の構造」を明らかにしたいということである。

いずれにせよ、先が長い旅になりそうなので、まずは地ならしのつもりで同時代の背景から見ていくことにする。

0. 序奏－ 1970 年 3 月～10 月に何が起こったか

1970 年 3 月に出版された「生贄の島－沖縄女生徒の記録」（文藝春秋）は、曽野が沖縄戦に取材した最初の作品である。「星と魚」の連載[1]に先立つ約半年前のことである。

「生贄の島」は、曽野綾子がノンフィクション作家としての新境地をひらく転機となった作品である。取材の発端は、1967 年の 12 月、琉球大学教授の仲宗根政善[2]の自宅で佐久川ツル、真玉橋藤子、喜舎場敏子の三人の元女子師範生に沖縄戦当時の話を聞いたことである。自分と同じ年頃の元女生徒たちの体験に衝撃を受けた曽野は、「戦争の真実を人々に知らせねばならぬ」[3]という強い使命感を抱いて沖縄戦の取材を始める。

曽野は当初、日米双方の沖縄戦体験者を対象とした取材を考えていたらしい。日本班、アメリカ班の二つのチームを作り、国内のみならず、ワシントンの政府記録や米国本土の関係者を追跡しようという大がかりなものである。「遠来の客たち」の作者らしい発想である。カトリック出身の曽野にとって、戦中に敵性外国人として拘禁された米国人シスターたちへの共感も強く、米国取材のハードルはさほど高くなかったようだ。

---

1 『心情公論』1970 年 10 月 ~11 月連載。

2 後に琉球大学名誉教授。仲宗根政善は沖縄女子師範教諭だった昭和 20 年にひめゆり学徒隊を引率し、多くの生徒を亡くした。『沖縄の悲劇』（編著、華頂書房、1951 年）。同書は『あゝひめゆりの学徒』（文研出版、1968 年）、『沖縄の悲劇』（東邦書房、1974 年）、『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』（角川書店、1982 年）などの版を重ねている。

3 『生贄の島－沖縄女生徒の記録』（文春文庫、文藝春秋社、1995 年 8 月）。

最初にこの企画に食指を動かしたのはリーダースダイジェストである。当時、夫の三浦朱門がアイオワ大学の国際創作セミナーに参加するため米国滞在中だったことも幸いした。曽野はアイオワを足がかりにアメリカでの交渉を始め、1968 年 3 月、ニューヨークのリーダースダイジェスト本社を訪ねている。結局のこの企画は、最終的な編集権をめぐって双方の意見がまとまらなかったが、この企画が実現していれば「生贄の島」は現在とは違った姿になっていたかもしれない。

曽野には「戦争の全貌」を俯瞰的に描き出す構想があったと思われる。「生贄の島」には、日本側だけでなく敵である米兵側の視点を取り入れようとした箇所がいくつか見られる。1972 年の「本土復帰」を目前にしたこの時期には、沖縄戦をめぐる戦記や映画などがいくつか作られていたが、曽野には独自の戦争記録への成算があったのだろう。

私の推測では、「生贄の島」にはある種の宗教的な発想（ヴィジョン）が隠されているのではないかと考えている。人間の善や悪のすべてを溶かし込む坩堝（るつぼ）のようなものとして〈戦争〉をまなざす視線のあり方は、ある種の超越性をおびるからだ。そもそも「犠牲の羊」を連想させる「生贄の島」という題名にも独特のニュアンスが感じられるが、ひとまず先に進める。

1968 年 5 月、アメリカから帰国した曽野と『週刊現代』とのあいだで企画がまとまった。対象は日本本土と沖縄の関係者に限ることになり、八月には本土での取材が始まった。11 月には、講談社の記者 4 人からなる取材チームが組まれ、月末には曽野をふくむ 5 名のメンバーが沖縄に渡り、2 週間の取材を行った。

このとき曽野は、200 人近い人々のインタビューや資料の苛酷さに声をあげて泣いたとされる[4]。曽野は後に、自分は一人の「語部（かたりべ）」にすぎなかったと述べ、このような形で歴史を書き残すことができた喜びを「あとがき」に記している[5]。

この時期の曽野は、沖縄への思い入れが最も強かった時期である。仲宗根政善や元女子生徒らをはじめとする関係者にこの本を手渡すべく、刷り上がった単行本 200 冊を携えて船で海を渡ったり[6]、沖縄刑務所の囚人たちのために生活用品を寄付しようとしたこともあるらしい[7]。いわば、沖縄との〈蜜月〉時代である。

一方、この時期の曽野の中では、〈沖縄〉に対する違和感がしだいに大きくなりつつあったと思われる。その直接の契機となったのが、1970 年 3 月の赤松嘉次元大尉の沖縄来県である。赤松氏（以下、文中の敬称略）は、太平洋戦争末期の渡嘉敷島に駐屯した第 3 特攻挺身隊の元隊長であり、島民約 300 名に「集団自決」を命じたとされる人物である。

同年 3 月 26 日、この赤松元大尉が、戦後 25 回忌の合同慰霊祭参加のために沖縄県を訪れ、キリスト教団体をはじめとする地元の反戦団体[8]から激しい抗議を受けた。抗議団の代表は、

4　鶴羽信子著『神の木偶－曽野綾子の魂の世界』主婦の友社、1979 年 8 月

5　「あとがき」（『生贄の島－沖縄女生徒の記録』文春文庫、文藝春秋社、1995 年 8 月）。

6　鶴羽信子著『神の木偶－曽野綾子の魂の世界』（主婦の友社、1979 年 8 月）には以下の記述がある。「本ができると、綾子は二百冊を船に積んで沖縄に粋、取材に協力してくれた人たちに贈呈した。それらの費用を差し引くと、綾子の手元には五万円だけが残った」。

7　「〈沖縄と私〉過去から未来へ」（財団法人沖縄協会『季刊沖縄』第 10 号 1998 年 10 月 31 日）

8　抗議団体は、「平和を守る沖縄キリスト者の会」（「平和を作る沖縄キリスト者の会」の誤りか＝黒澤注）、「歴史・社会科教育者協議会」、「日本原水爆禁止協議会沖縄県支部」、「日本平和委員会沖縄県支部」、「日本科学者協議会沖縄県支部」等。この時、空港で抗議文を読み上げたのは那覇市職労の山田義時。翌 27 日の泊埠頭には渡嘉敷村郷友会青年部、「平和を守る沖縄キリスト者の会」など約 30 人が集まり抗

那覇空港で抗議文を読み上げ、島からの退去と謝罪を要求するなどの抗議行動を展開したため、赤松は渡嘉敷への渡航を断念して29日に本土に帰った。[9]

こうした一連の出来事が曽野を刺激したことは確かである。曽野は、同年秋の赤松隊の戦友会[10]に姿を見せる。出席者の一人である中西昭雄が、曽野の同席を記憶している。当時、朝日新聞社の記者だった中西は、「その年の暮、赤松隊の戦友会が大阪で開かれ、ぼくも声をかけられて出席した。件（くだん）の『陣中日誌』の刊行記念を兼ねての戦友会らしかった」[11]と述べている。

会合の時期については、曽野が9月19日、中西が「その年の暮」というズレがあるが、記憶違いもあると思われるのでひとまずおく。少なくとも、1970年の8月以降に「戦友会」の会合があったことは確かである。なぜなら、沖縄での抗議が契機となって元隊員たちによる当時の記録の整理が始まり、8月にはすでに谷本元伍長がタイプ印刷した『陣中日誌』が元隊員や関係先に配布されていたからである[12]。現在のところ、9月の集まりは配布された『陣中日誌』（タイプ印刷）についての報告や意見交換、年末の会合は慰労をかねた正式な刊行祝いといった意味あいの会合だったのではないかと推測している。

中西昭雄に戦友会の関係者として声がかかったのは、すでに同年夏に渡嘉敷および赤松元大尉らに取材した記事[13]を『週刊朝日』に書いていたからである。この席で、中西は曽野から「小説にしたいから教えてくれ」と頼まれた。「生贄の島」刊行の時点で渡嘉敷は対象になっておらず、「集団自決」の取材においては、中西に一日の長があったのである。中西は曽野に二種類の資料を渡し、今後の赤松隊の会合の予定なども教えた記憶があるという（同前）。

ここでの二種類の資料とは、後に裁判で「集団自決命令」の有無をめぐる大きな争点となる『慶良間島・渡嘉敷島の戦闘概要』（渡嘉敷村編）と『陣中日誌』（赤松隊元伍長・谷本小次郎編）のことである。曽野は、これら二つの資料を手にしたことで、「ある神話の背景」の構想を具体化する糸口をつかんだことになる。とりわけ、赤松隊の『陣中日誌』を入手したことは、曽野にとって大きな収穫だったようである。

曽野はここで、『沖縄ノート』を出版したばかりの大江健三郎に、この貴重な資料を見せてやろうという同業の先輩としての「親切心」をおこす。取材や調査を仕事にする者にとって、かたちになっていない資料や情報は、いわば埋蔵金なみの価値があり、曽野にとっても大きな決断だったと思われる。しかし、「陣中日誌」が必要かという曽野の問いに対し、電話口の大

議活動をしたが、赤松は姿を見せなかった（後に、赤松は米軍からかりたボートで単独で渡嘉敷に渡ろうと試みたが断念したことが分かる）。その夜、同村郷友会の与那嶺英吉部長ら約20人が那覇市内に集まり、午前1時頃まで慰霊祭に赤松を招聘した玉井村長を含めて談合した結果、同氏の慰霊祭出席阻止の方針を打ち出した。この連絡を受けた赤松がわも「この分では衝突はまぬがれない」と判断し、渡嘉敷行きを断念した（『琉球新報』1970年3月28日）。同氏は3月29日に空路で本土に戻った。

9　福地曠昭（当時教職員会の政経部長）は、1970年3月29日午後、那覇空港で「赤松元大尉の即時台頭を要求する」抗議声明を赤松氏に手渡した（『琉球新報』1970年3月30日）。

10　曽野によれば、戦友会の日付は1970年9月17日。

11　「『ある神話の背景』の背景」（『新地平』1988年7月）

12　赤松嘉次によれば、8月には元隊員の谷本小次郎がタイプ印刷した『陣中日誌』のゲラを元隊員や関係先に配布したとのことである。中西側の記述では、渡嘉敷取材の前に兵庫県加古川市の赤松を訪ね、ちょうど部下だった辻正弘元中尉が陣中日記を整理していると聞き、同氏に同道してもらって谷本小次郎元伍長の住む高松市に行き、後に『陣中日誌』として刊行される記録を読んでいるという（「集団自決の島－沖縄・慶良間の25年目の熱い夏」（『週刊朝日』終戦記念特集、1970年8月21日増大号）。

13　「集団自決の島－沖縄・慶良間の25年目の熱い夏」（『週刊朝日』終戦記念特集、1970年8月21日増大号）

江から返ってきたのは「私が信じられないような激しさで『要りません』と怒鳴ったのです」[14]という、曽野の自尊心を粉砕するような非礼だった。

以後、「大江氏との一切の関係を断ちました」という曽野は、後に「ある神話の背景」の取材を始めた契機の一つとして、大江の『沖縄ノート』（岩波書店、1970 年 9 月）をあげている[15]。執筆の背景にこうした「私怨」がはたらいていたことも、またひとつの人間的な側面だろう。

以上に見たように、1970 年 9 月の時点で、曽野がすでに「ある神話」の小説化への意欲をもっていたことが分かるが、実際に曽野が沖縄取材に向かうのは翌年の夏頃からであり、さらに雑誌『諸君』に連載が始まるのは 1971 年 10 月から 1972 年 9 月のことである。戦友会への出席から約 1 年間のブランクがあるわけだが、この時期に曽野の中で何が起こっていたのだろうか。

本稿で取り上げる予定の「星と魚」（1970 年 10 月）、「甘酸っぱい部屋」（1971 年 1 月）はちょうどこの時期に発表された小説である。「生贄の島」において、謙虚な「語部」として自己を定義した曽野だが、沖縄取材の過程で生じた違和や反感は澱のように積りつつあった。赤松来県をめぐる沖縄の報道に刺激された曽野が、その毒を「小説」というかたちで紙上に吐き出したのがこれらのテクストではなかったかというのが、現在の私の見通しである。

孫子に「始めは処女の如く、終りは脱兎の如し」という言葉があるが、一説では「脱兎」は「虎」をさす方言らしい。「生贄の島」から「ある神話の背景」にいたる 1 年数か月のあいだに、「語部の謙虚」から「虎の辛辣」へと、曽野における変容は水面下で確実に進行していたと思える。

以上、長い助走になってしまったが、次節においては「星と魚の恋物語」のテクストにそって考察を進めていくことにする。

1. 魚の章―楽園のアダム

物語は、二つ象徴的な海の表情から始まる。一つは薔薇色の夕映えに染まる「陶酔的な海」、もう一つは不安と懐疑の表情を浮かべる「暗黒の海」である。明と暗、光と闇がするどく対峙するこの冒頭の風景は、すでにこの物語の悲劇的な結末を暗示しているといえるだろう。

時代背景は 1970 年代の初頭、アメリカ統治下の「具志堅健次」という名の吃音の少年が主人公である。15 歳の健次は、日本のプロ野球に夢中である。少年の母は沖縄本島南部の百名（ひゃくな）にある「南風荘」という小さな旅館で住み込み女中をしている。健次は学校から帰ると南風荘の雑用の手伝いなどをして小遣いをもらい、その中から買ってもらった那覇球場の外野席の切符をアメリカ製のビスケットの古缶の中に大切に入れている。

健次の生活は、平凡だが穏やかである。健次の「吃り」の理由ははっきりしないが、幼少期の「心理的な影響」として、母が米軍施設で働いていたことが匂わされている。母が旅行客に話すところによれば、少年の父は「本土から来た金沢生まれの人」だったというが、少年の父の生国は「客の都合によって時々変わる」のであり、あるときは国定忠治で有名な赤城山の麓だったり、東北は秋田だったりする。

14「強制された死か、個人の尊厳か」（『WILL』総力特集　集団自決を悪用する者、2008 年 1 月）
15 注 14 に同じ。

ここでの母の表象の背後には、アメリカ統治下の「沖縄の庶民」に対する意地の悪い視線がある。テクストは、健次の母の中の「薄汚いもの」について次のように描写する。すなわち「健次の母は無力な女だったから、他人を足がかりにして少しばかり羽振りよくなりたかったのだ」、「初めは本土の男の妻になること、それがうまくいかなかったときには、アメリカ人の妻になること。しかし、そのいずれにも失敗すると、彼女は健次の血に依存したりするのだった」。

おそらく、この描写は人口に膾炙した「物呉ゆすど我御主（生活の手段を与えてくれるのが私の主人である）」[16] という伝承の焼き直しである。琉球王朝の第二尚氏の誕生にまつわるこの俚諺には多くの解釈がある[17] が、「星と魚」のテクストは、以下のような文脈において〈沖縄〉を引用し、表象している。すなわち、かつて「本土の男の妻」から「アメリカ人の妻」へと主人（あるじ）を変え、今また高度経済成長下の豊かな日本への「本土復帰」を望んで「父の血」に依存する「無力な女」あるいは「狡猾な女」としての〈沖縄〉である。

ここには蔑視とミソジニーがないまぜになった視線がある。この視線の性質は、「星と魚」のみならず、「切り取られた時間」の島の〈女〉が唐突にみせる「狡そうな眼つき」、秘密、共謀、嘘といった「シマ社会」の閉鎖的なイメージや、援護法の遺族年金[18] をめぐる島民への猜疑にみちた視線とも共通するものである（「ある神話」175 頁）[19]。

一方、主人公の少年は、これらの「沖縄の庶民」の狡猾さ、俗悪さとは全く異質な存在として描かれている。「母の表象」が、沖縄の俗悪な側面だとすれば、〈具志堅健次〉の表象にはむしろ高潔といってよいピュアな愚直さ、誠実さが感じられる。

健次は、ある日学校で「幸福」という題の作文を書かされて戸惑う。健次には「不幸」という状態が理解できなかった。健次は、自分の幸不幸を他人と比較したり、対象化して考えたことはなかったからだ。ただし、自分が「こうふく」であることだけは確かだった。教師は、健次が「吃り」であることや母子家庭という境遇から「不幸」と決めつけ、苦労話を書くことを期待したが、健次は「ぼくはずっとこうふくでした」と繰り返して教師を呆れさせる。

加えて、少年には特殊な能力（ギフト）が与えられていた。一種の「映像記憶」（直感像記憶）の能力をもつ少年は、自分が見た風景を細部にわたるまで視覚的に記憶することができた。少年には、まるで第三者を見るように、母の働く南風荘の前庭を掃いている自分、裏庭でビールの空箱を持ち上げようとしている自分の姿が、一枚の絵を眺めるように鮮やかに見えていた。

少年の世界に不安や懐疑はなかった。少年は、その風景の一部となって、そこに溶け込み〈陶酔〉していた。嵐の日には、「髪を逆立て地にひれ伏す木々」のように怖れ、「夜明けの瑞々しい微光」、「怠惰な真昼の灼熱」、「痴呆的な夕映えの残照」、「狂人的な月光」の中でも、すべてその時々の風景の一つとして存在し、安らかだった。

---

16 「物呉（ものく）ゆすど我御主（わがうすう）、内間御鎖（うちまうざし）ど我御主」（財貨を与えてくれる者こそ我が主であり、それは内間金丸さまである）は安里大親のことば。第二尚氏王統の始まりの伝承による。

17 伊波普猷著『古琉球』沖縄公論社、1911 年、大田昌秀『沖縄の民衆意識』新泉社、1973 年、新城俊昭『琉球・沖縄史』（沖縄県歴史教育研究会、1994 年）ほか多数の解釈がある。新城俊昭は、易姓革命論との関連においてこの俚諺を解釈し、『沖縄解放の視覚』（「物呉ゆすど……」改題、沖縄研究会編、田畑書店 1971 年）は、この伝承に民衆による政治変革への可能性を読み込もうとしている。

18 戦傷病者戦没者遺族等援護法。昭和 27 年制定され、昭和 32、3 年頃に判定。

19 曽野には「物呉ゆすど」の諺についてもう一つ使用例がある。すなわち、1969 年 1 月 18 日付の琉球新報に曽野は「私にとって沖縄とは何か・心優しい人々の悲劇」というエッセイを掲載している。

ここでテクストにおける〈陶酔〉という語の独特な使用法には注意が必要である。おそらく、「人間と世界との一体化」という「絶対幸福」のイメージには、宗教的な至福や恩寵の感覚が暗示されている。すなわち「楽園のアダム」である。テクストは、沖縄の神話、伝説を引用しながら、これらのイメージを補強している。

少年の母が働く南風荘が「百名」の海岸近くにあるのは偶然ではない。百名は、琉球の創生神アマミキヨが上陸した最初の場所である。琉球最古の歌謡集『おもろさうし』には、「あまみきよ」と「しねりきよ」の二神が日神に命じられて島々と人間を造ったという創生神話が収められており、これから始まる「星と魚の恋物語」の伏線にもなっている。やがて、中学を卒業した健次は、南風荘にやってきたブローカーの男の斡旋で石川県に就職が決まり、金沢ホテルの社長の娘である岩垂璃々子と出会うことになるだろう。

以上に見てきたように、この章における語り手の意図は、貧しさゆえに「物呉ゆすど我御主」という卑俗な生に堕落した母の表象をアンチテーゼとして、〈具志堅健次〉という無垢で善良なアダムとしての〈沖縄〉イメージを作り出すことだった、とひとまずは言えるだろう。

2. 星の章－恩寵のとき

具志堅健次が〈魚〉のメタファーで語られるのに対し、〈星〉は岩垂璃々子のそれである。璃々子は、健次が就職した金沢ホテルの社長令嬢で、「いかにも退屈し切っているといった風情」の「驕慢な色」を浮かべた高校１年生の少女である。

璃々子の父岩垂棋一郎は、外見は紳士然とした人物だが、仮面の背後の顔は冷酷なスノッブであり、「愛妻家」を標榜しながら、裏であちこちの温泉や遊郭に女を囲っている。一方、その妻は、愛のない夫婦生活の空虚を埋めるかのように若い能楽師にうつつを抜かしている。

夫婦には璃々子の他にもう一人の長女がいるが、夫婦は放任の代償に娘たちを甘やかし、とりわけ璃々子には女王のような気まぐれを許している。ふだんの璃々子は、東京で大学に通う姉のマンションで暮らし、気が向くと帰ってきては地元の取り巻きと徹夜トランプに興じたり、若い男とドライブしたりといった生活を送っている。

こうした虚偽にみちた両親のもとで育てられた璃々子は、すでに10代で老成した雰囲気をもつ「変わった娘」として成長した。璃々子は、「自分の好悪や憎悪に対してまっしぐらに走っている眼つき」をしており、その点においては「一切の偏見のかけら」もごまかしもなかった。璃々子には、「世俗的な損得勘定」や「お為ごかし」、「権力への追従」もない。いわば、璃々子は健次とは別の意味で「純粋」で「誠実」だった。

璃々子は、健次の前に「人魚」、「かぐや姫」のメタファーとともに現れる。健次が町の喫茶店のガラス越しに璃々子を認めたとき、少女も彼の方を見つめ返し、このとき二人の視線は「溶接」される。髪の長い少女は天から降り立った「かぐや姫」のように見えたが、同時にガラス壜の中の「奇妙な動物」のようにも見えた。

健次は、しだいに璃々子のもつ「強さ／力」に惹きつけられていく。璃々子は、金沢ホテルの従業員たちに勝手な要求を突きつけ、彼らはそれに逆らえない。健次は、自分もふくめた男たちが璃々子に「ホールド・アップ」させられているんだと感じ、その「力」に憧れをもつようになる。

ある日、璃々子は、戸惑う健次をトランプのゲームに誘う。「純日本風の大きな邸宅」に招

き入れられた健次は、取り巻きの「頬のふくらんだ娘たち」の「体臭を嗅」ぎ、とまどいながらも徹夜で「セブンブリッジ」に興じる。それは、健次にとって夢のような時間だった。沖縄のことに全く無知な二人の娘たちに「外国人扱い」されたり、「この人、日本語できる？」と小ばかにされても、健次は「えへへ」と笑うだけだった。それは笑いというより「悲しみに満ちた動物の叫び」に近かったが、はた目からはそれが「意味合い不明の薄ら笑い」に見えるのだった。

健次が、娘たちの一人の黄色のバッグを「オール―（青）」という方言で呼び、「色盲」と貶められたときも、璃々子は「青と思えば青なのよ」と、冷静な声でその場を制した。健次が育った大宜見村謝名城の古い方言では、色を表すことばは四種類しかなく、祖母は黄色をオール―（青）と呼びならわしていたのである。そんなとき健次は璃々子と自分だけに通じる特別な結びつきを感じた。

明け方近く、璃々子は「ローマの遊び女のようなしなやかな眼つき」で健次を見つめ、「これから、あんたは私の手下になるのよ」と小声でささやく。健次がうなずくと、璃々子は「五分間だけ、私と一緒に寝かしてあげる」と右手をさし伸べた。健次は璃々子の柔らかい細い腕の上に頭を置き、律儀に５分間だけその寵愛を受けた。

一見、不釣り合いなこの二人にはよく似た点があった。すなわち、二人はともに寡黙であり、泣かなかった。少女が泣かない理由は、「周囲が醜くすぎる」からである。少女は、汚辱にまみれた世界の中でひとり絶望に耐えている。少女は大人たちを信じない。また少女を理解する者もいなかった。

一方、少年が泣かない理由は、あるがままに世界を受け入れているからである。前節ですでに見たように、少年は木や花や鳥や獣のように生まれたままに生きている。つまり、すべては「神の摂理」のままということになる。神の創造した予定調和的な世界の中ではすべての出来事ははじめから人知の及ばぬところで決められており、因果的な理由はない。

少なくともこの二人が、世俗的な欲得にまみれた大人の世界とは別のところで生きていることだけは確かだった。二人のあいだの決定的な違いはやがて明らかになるが、ここでの少年は満ち足りて幸福である。

夏のある日、少女は少年をドライブに誘って無人の別荘に忍び込み、盗み出した「天体望遠鏡」と「海岸動物図鑑」を少年に与える。これらの賜りものは、女神から少年に与えられた特別な恩寵の品々であり、象徴的な意味をもっている。すなわち、望遠鏡は「宇宙の契約のもとにその意志の通達機関」として設置されたものであり、その視線は星に向けられ、その愛撫を受けるためだけに存在するものであって、「地上のものを見ることによって汚辱にまみれさせてはならないもの」であった。また、図鑑には見覚えのある故郷の海辺の名も知らない貝などが載っており、少年はそれによって「はなわれいし」「きぬようばい」「しらほふしで」など言葉を覚えるのだった。

以上の設定から楽園のアダムとイブを連想することはたやすい。少女は少年に知恵を与えることによって、天の意志を仰ぎ、世界を知るすべを与えたのである。

３. 孔雀殺し――ソドムとゴモラの火

しかし、少女の邪悪さはしだいに明らかになる。次に少女が少年をいざなうのは「孔雀殺し」

である。晩秋の静かな雑木林の中に十五六羽の孔雀を飼う小屋があった。少女が先に立つと、「パパの猟犬（いぬ）」はガラス玉のような眼球に璃々子の影を映しながら、忠誠をこめていじらしく少女を見つめた（ここでの「猟犬」の忠実さは少年と二重写しになっている）。

少女が猟犬をけしかけると、あたりに死の匂いがただよった。少女が標的にしたのは「驕慢な孔雀」であり、「おとなしい鳩やみじめなドブ鼠」ではなかった。少女は虚栄そのもののような「驕慢な孔雀」が砂にのたうち廻り、虚空を見つめて死ぬのがみたかったのだ。怒りに身を震わせ、「厳然としたあでやかな胸」を膨らませて犬と対峙する雌もいたが、やがて、最後の一羽もまたガラス玉の眼に青空を映して砂の上に横たわった。

絢爛と紅葉する晩秋の風景の中で、残虐な死と生が交錯する。ここでの少女は、生殺与奪の権を握る暴君であり、神の怒りの代理人であるかのようである。「ガラス玉のような眼球」という形容が、猟犬と孔雀に等しく用いられているのも暗示的である。すなわち、「神の木偶」としての人間もふくめ、地上のすべての被造物をその背後で采配する絶対者の存在である。

この遠出によって、健次と少女の結びつきは一層強まったかに見えた。これらいっさいの行為のあいだ中、二人はすべての規範を越えたところにいた。そこは善悪の彼岸であり、世俗の道徳や規範からはるかに遠い場所、あえていえば神の領域に近いところだったと言えるだろう。

やがて冬が訪れる。反逆の総仕上げは、船を焼くことだった。ある激しい雪の日、少女は突堤の先に舫っている漁船を燃やすよう健次に命ずる。ガソリンのポリタンクを片手に、新聞紙の束を抱いて健次は雪の中を歩きだす。大魚のような船の腹の中は、母の胎内を思わせた。船は健次の意図を察して驚愕の色を浮かべたように見えた。

ついに健次は、少女の真の願いを知った。「希望」によって世界を明るくすることが彼女の願いだった。それは〈絶望〉を溶かす火である。それは温かく、まぶしく、それ自体が詩であるような完全な瞬間だった。健次は、放心して燃え盛る船を眺めながら、その甘さに陶酔した――。

しかし、これらすべては少年の錯覚だった。結局、少女は健次を置き去りにしたのである。待ち合わせの場所には誰もいなかった。健次は少女に鼻づらを引き回されたあげく、最後の瞬間に冷酷に突き放された。恩寵から見放されたアダムには、永遠に続く絶望の日々が残されるだけである。

4. 少年はなぜ「吃る」か――少女のミッションをめぐって

以上、「星と魚」の恋物語の顛末をテクストにそって見てきた。次に、本文中の疑問や問題についてさらに考察を進めていきたい。

冒頭に述べたように、語り手の意図は、「沖縄への違和」を一種のファンタジーとして、社会諷刺ないしは宗教的暗喩をもって描くことだったと考えられる。そして、その直接の契機が、赤松元大尉の来県だったことも先述した。いいかえれば、「星と魚」は単なる「恋物語（ファンタジー）」というより、当時の社会背景を反映した、きわめてメッセージ性の強い「論争的」なテクストなのである。

〈少女〉は、そうした語り手のメッセージを伝えるべく天から降りてきたことになる。少女が少年に伝えようとしたこと、それは世界の「不条理」をこそ正視せねばならず、「偽りの希望」や幻想にしがみついてはならないという、沖縄社会への「戒め」ないしは「警告」だったと思

われる。

おそらくこの背後には、旧約聖書の「ヨブ記」がある。ヨブ記は、神の裁きの不条理をテーマとした物語である。正義の人ヨブは、不当な試練を与えられ、理由も分らないままに絶望の中で苦しみ続けねばならない。神のわざは謎に満ち，人知を超えている。そこでは、善きものが報われ、邪悪なものが罰されるという世俗の原理は意味を失っている。

「弱い人間は夢みがちになる」とテクストは述べる。少女にとって「船を焼く」ことは、虚栄と虚偽にみちた世界に対する「絶望」の意志表示である。少年はその火を「希望」と錯覚した。少女が強いのは、ただ一人でこの絶望に耐えているからである。これに対し、少年には他にすがろうとする「甘さ」があり、ゆえに少年は弱い。少女は、少年の「希望」を冷酷に打ち砕くことによって「絶望」という苦い真実を教えようとした、ということになるだろう。

そして、それは作者自身の宗教的な信条であるとともに、強固な人生観でもあるらしい。曽野によれば、自分には幼いころから、現世とは「ろくでもない絶望的な所」であり、逆に「希望」こそ信用ならないものであるという確信があったという。

1971~72 年の『毎日新聞』に連載された「絶望に始まる」(『仮の宿１』)[20] というエッセイの中で曽野は以下のように述べている。

> まだ字もろくろく書けなかった満五歳くらいのころから、本当に徹底して、骨の髄から、生きていくことはろくでもないことだと思っていました。／私が抱き続けていた違和感は、世間や教師や先輩が、私から見れば嘘と決まっている希望を、まるでハトかコイに餌でもくれてやるくらいの無責任さで、ぽいぽいと若い人たちに投げ与えていることでした。(中略)大人たちはなぜ、青年たちに、この世は信じがたいほど思いのままにはならない所なのだということを、きっちりと教え込まないのでしょうか。

少女は少年に「智恵」を与え、甘い誘惑を味わわせる一方で、最後にすべてを奪った。あるいは、そうした不条理こそ少女が残酷な仕打ち(スパルタ)を通して少年に教え込もうとした教訓だったともいえる。

こうした曽野の人生観は、「星と魚」における少年の「吃り」という設定にも反映している。テクストは、少年の「吃音」について次のように描写する。

> 星が泣かないのは、周囲が醜すぎるからだ。魚が泣かないのは、涙が海水と混じって泣いているとさえ見えないからなのだ。そして魚が口をきかないのは、何ということはない、<u>只吃るから</u>……。

少年と少女の共通点は「寡黙」であり、「泣かない」ことである。ここでは、少女に「理由」が与えられているのに対し、少年には「只吃るから」という不可解な答えしか示されていない。仮に少年の「障害」も含め、すべてのできごとは「不条理」であり、「天の配剤」だとしても、ある種の違和感がぬぐえない部分である。

20「絶望に始まる」(『仮の宿１』『毎日新聞』1973 年 4 月 1 日)。

語り手は、なぜ「沖縄」を表象するさいに「吃り」という設定にしたのだろうか。ここにはもう一つの意図があるのではないか。すなわち「吃音」はことばに関係がある障害である。方言札の歴史を持ち出すまでもなく、沖縄出身者が「内地」で出会う差別の多くが、言語コミュニケーションにかかわる問題であることはよく知られている。また、少年の吃りの「心理的な要因」として、母が米軍施設で働いていたときの「ある事件」の影響が匂わされている。

しかし、テクストは、これらの問題をひとたび前景化するかに見えて、すぐにはぐらかし、矮小化してしまう。すなわち、母から話を聞いた「精神病医（きちがいいしゃ）」は「にやにや笑い」ながら曖昧な返事しかせず、レイプ事件の真相も、母の方が「アメリカ人に夢中だった」という従姉妹の噂話によって発話の力を中和されてしまう。さらには「そんなことで、自分が傷を受けたなどとは思えない」という「少年自身のことば」によって、最終的に「ものごとの輪郭」が定義され、決定づけられる。

こうした巧妙な「仕掛け」があちこちに埋め込まれているのが、このテクストの特徴である。比喩的にいえば、ひとつずつ地中に埋もれた地雷のポイントを提示し、その信管を外していくような「論争的」なやり方である。

おそらく、曽野は「生贄の島」の沖縄取材の過程で、「米国」のみならず「日本」に対する「抗議／告発」という地雷の存在を感じ取っていた。そこに 1970 年 3 月の赤松来県があり、これによって曽野の沖縄との「蜜月」は吹き飛んだ。曽野はその激しさに衝撃を受け、みずからにも向けられる可能性のある「告発」の矢を打ち落とす必要を感じたのではないか、というのが私の推測である。

４.「説教の構図」――地雷ポイントをたどる

「星と魚」には、この他にもいくつかの「地雷外し」のポイントが仕掛けられている。いわばそれは、米軍統治ないしは日本による支配、抑圧を告発する「沖縄の潜在的な語り」を封じる仕掛けである。以下にそのいくつかをあげて、若干の考察を示したい。

たとえば、その一つが主人公の「集団就職」をめぐる描写、設定である。少年の母に就職話をもちかけたのは名古屋近辺から来たブローカーの男であり、三州の瓦職人が不足しているので人集めに来たという。会話の中には、今治のタオル工場の求人に来た「四国あたりの男」の話も出ており、男たちの背後からは高度経済成長下の「本土」の熱気のようなものも伝わってくる。

ブローカーの男は、「僕、沖縄に人買いに来たのよ」という挑発的なことばで口火を切る。しかも男は「大入道のように頭の禿げた巨漢」である。沖縄で「人買い」といえば、少年たちの人身売買制度として悪名高い「糸満売り」を連想するところであり、読み手は無意識のうちに軽く身構えるよう仕向けられる。

しかし、結局この男は軽口を叩いただけであり、世慣れした斡旋業者にすぎないことが分かる。つまり、男のいかにも「極悪人」めいた外見や「人買い」といった表現は読み手へのフェイントだったことになる。すると母親は警戒を解いてむしろ饒舌になり、自分から少年の職探しを頼むことになる。

本来なら、ここには高度経済成長下の本土と、米軍統治下の沖縄の構造的な格差の問題があ

るはずである。だが、こうした語りの操作により「集団就職」をめぐる社会的な背景は問題化されず、あらかじめ封じられてしまう。その上で、テクストは少年の「愚直さ」を持ち上げ、「沖縄から来たというだけでいたわられ甘やかされる他の集団就職者」と比べれば、「ずっと緊張した慎ましい気分で仕事を始められた」と述べる。

テクストによれば、少年の「さしあたりの幸運」とは「吃り」ゆえの謙虚さと「なまじっかな政治意識など持ち合わせていなかったために労組のない会社などにびくともし」ないがまん強さである。寡黙な少年は、本土に向かう新卒の少年少女の中で一人だけ船酔いもせず、吐瀉物の臭いの立ちこめる船底に身を横たえて海を渡っていくことになる。

ここでは、少年の「油虫」のような生命力が称揚される一方で、「沖縄から来た他の集団就職者」の「甘え」が差別化され、貶められる。この背後で実際に行われているのは、労働力の選別である。ここにあるのは、個人の資質や意欲の問題というより、むしろ今日の外国人労働者に近い状況だろう。

偶然の符合だが、ちょうど赤松元大尉の来県を報じた 1970 年 3 月 27 日の『琉球新報』の同じ紙面に、「育成協」の発足に関する記事が掲載されている。「育成協」は「勤労青少年を育てる協議会」の略称で、急増する沖縄からの集団就職者の非行に危機感を覚えた沖縄関係者[21]が対策に動いたものである。同紙によれば、東京で補導された沖縄の非行少年の数は、1968 年の 87 件 79 人から 69 年の前半（1~8 月）にはすでに 91 件 86 人と倍増している。しかも集団暴行事件や多額窃盗、強盗など悪質化する傾向にあり、沖縄が日本に復帰すればこうした傾向はさらに強まると予想されている[22]。

しかし、テクストはこうした現状に対してまったく無知である。集団就職者の定着率の悪さを青年一般のメランコリックな絶望感と混同したり、上記の「南援会（南方同胞援護会）」に見られるような地縁、血縁の相互扶助を「全く実態のない同郷人意識」[23]として一蹴するなど、沖縄県の歴史的な背景についての無理解を露呈している。

当時の沖縄は本土復帰運動の熱気のただなかにあった。これらの運動において「沖縄教職員会（初代会長屋良朝苗）」が果たした役割は少なくない。テクストにも集団就職者を送り出す教師たちの姿が描かれ、「今は労働者も権利を持つ時代だ。不当な労働条件には、闘って泣き寝入りしないように」と「励ましの言葉」をかけるエピソードも出てくるが、こうした教師の表象や言説は「この頃の先生たちは政治屋だからね。アメリカに向かう時や、復帰問題と同じように権利権利と馬鹿の一つ覚みたいだけど、仕事は決してそんなもんじゃないさ」という、少年の母の揶揄的な語りによって相対化され、無力化されている。

折しも 1967 年 2 月 24 日には、数万人の教職員が立法院の建物を取り囲み、同法の立法を

---

21 「南援会（南方同胞援護会）」の大濱信泉会長の呼びかけで、「沖縄の集団就職者を世話」をする目的で結成された。3 月 26 日の打ち合わせ会には、「琉球政府東京事務所をはじめ関東沖縄経営者協会、県人会琉球青英海などの沖縄関係者多数が集まった」（『琉球新報』1970 年 3 月 27 日）。

22 注 21 に同じ。

23 テクストに述べられている「同郷人意識」とは、東京を中心とする都市化、近代化の一つの局面にすぎず、限定された条件の中での地縁、血縁共同体の解体という一般的な観察にすぎない。多くの場面で沖縄県出身者の相互扶助のネットワークは確かな実態をもっていた。大阪の大正区、横浜の鶴見区などが有名。海外移民の歴史の中でも県人会等を中心とする共同体ネットワークが果たした役割は大きい。

阻止した「教公二法立法阻止闘争」[24]が起こっている。当日は、警察の警戒線を突破したデモ隊が立法院前を占拠するという事態になり、立法院議長が本会議中止を決定、与党議員らは米軍ヘリコプターで脱出するという、米軍統治下の沖縄をゆるがす激しいものだったとされる。

この運動は、単なる「本土復帰」の運動というより、米軍統治下における現実的な利害調整から反戦平和運動までの複雑な動きを含み込んだ大きなうねりだった。すなわち、敗戦直後の食糧や住宅の確保から戸籍や地籍の回復、米軍検閲下の言論出版の自由や権利の拡大、軍用地や基地問題、主席公選制度の実現等々といった多くの要素を含んだ住民運動は、県民の自治意識に大きな影響を与えたとされる。

ここには、「左翼かぶれ」の教職員や知識人、メディア、偽善的なヒューマニズム等々、曽野の嫌いなものがそろい踏みしている。曽野にとっては、こうした沖縄の人々のあり方は、「どこへもお尻を持って行きようのないこと」を他のせいにする「外罰的」なあり方である[25]。「この世がどのような社会構造になっても、誰にも、どうにもならない悲しみというものはどうしても残る」のであり、「本当に苦しんでいる人は、ひとりです。それが苦しみの、私怨の純粋性というものです」[26]という信条を持つ曽野にとっては、戦争被害や米軍統治下の基地問題に対する抗議は、すべて「私怨」の「公憤」へのすり替えと映るらしい。

これは先述の「物呉ゆすど我が主」の解釈の文脈にもかかわってくる。曽野は「私にとって沖縄とは何か・心優しい人々の悲劇」[27]というエッセイの中で、「里子」、「実家」というメタファーを用いて、沖縄と日本の「親子」としての血縁や情的な結びつきを強調している。少年もまた「半分日本人」であり、見知らぬ父の血を頼りに本土に職を求めるという設定である。表層のわかりにくい修辞や韜晦を取り去れば、この文章の真意は以下のようなことだろう。

すなわち、沖縄は戦中戦後にひどい目にあったかもしれないが、そのことで「親」である「日本」を責めたり同情を求めたりするのはやめなさい。基地返還も、削られた予算も、世の中は思うようにならないことばかりだ。へたな同情や甘やかしは、本人のためにならない。あなたたちの「悲痛な感傷性」はかえって逆の結果しかもたらさないからである。

みずからが行った「集団自決」を赤松のせいにするな、本土の人々に同情を求めてあれこれの不幸を嘆き、公憤に逃げるな。他にすがって解決をもとめる甘さこそが誤りである。不条理こそがこの世の真理である。この冷酷な真実に黙って耐えよ、という「沖縄への箴言」がそれである。

つまり、曽野は、左翼かぶれの「心優しき人々」に「説教」したかったのだ。このミッションのために少女は天から降臨した。作者の意を挺したこの少女の使命は、安易な希望やヒューマニズム、左翼イデオロギーにかぶれた沖縄の甘さを正すことにこそあるというわけだ。

---

24 施政権返還前の沖縄の公立学校教職員の身分は、琉球政府公務員と教育区公務員のいずれかであった。琉球政府公務員については1953年に制定された琉球政府公務員法によって身分保障がなされ、教育区公務員についても「地方教育区公務員法」「教育公務員特例法」の二法案の制定が進められた。同法には、教職員の政治行為の制限、争議行為の禁止、勤務評定の導入が盛られていたため、沖縄教職員会が強く反対していた。

25 「私である方法」(『仮の宿28』『毎日新聞』1973年10月7日)。

26 注25に同じ。

27 「私にとって沖縄とは何か　心優しい人々の悲劇」『琉球新報』1969年1月18日。前出。

5. ひきつれは癒着したか――「恋物語」のゆくえ

そもそも「星」と「魚」は本当に「出会った」のだろうか。

この物語の出発点には、少年と少女が背負ってきた異質な運命を〈本土〉と〈沖縄〉の「恋物語」として結びつけようとする着想があった。しかし、少年が〈沖縄〉そのもののメタファーであり、少女が語り手のメッセンジャーだとすれば、この非対称な構図自体がすでに破綻していたというべきである。

テクストは「自分が背負ってきた重苦しい運命の、全く意味が失われるような所」で二人は出会ったと述べる。すなわち、「具志堅健次」は、本土でさまざまな差別的な扱いを受けてきた。そこでは「自分に親切にしてくれる人も、自分がオキナワの出身でしかも吃りだから労ってくれる」のであり、「自分を嘲笑する人は《オキナワ》と吃りをともに丸めて健次に塗りつけ、まさに糞まみれのようにした」という。

一方、「岩垂璃々子」は、これらの人々とはまったく違っていた。少年と少女は、それぞれが「亡霊のように、火傷のひきつれのように背負ってきた重苦しい運命」の意味が全く失われるような特別な場所で遊んだ。「侮蔑や軽視が波打際にあるとすれば、二人は天然の星が人工衛星とたわむれる空の高み」にまで登ったのだという。

では、「二人の背負ってきた重苦しい運命」とは何か。ここで使われている「火傷のひきつれ」という表現は重要である。この表現は、「星と魚」から約半年後に書かれた「切り取られた時間」の中にも登場する。そこでは、「集団自決」の生き残りである島の「女」と、かつて日本軍の兵士として島に駐屯した「釣師」という「二人の当事者」が、まさに二十数年前の「自決」の日の記憶を想起しようとする瞬間に立ち上がってくる表現である。

「切り取られた時間」では、さらにこの言葉の周辺に「癒着」「猥雑な気分」といった言葉を配置することによって、ある種の性的な気分や行為のイメージまでも喚起するよう仕組まれている。つまり、ここには、「集団自決」の記憶をめぐる島民と元日本兵の「癒着」ないし共犯性を、男女の性的メタファーを通じて語る意図があったことになる。

ただし、「星と魚」における「重苦しい運命」の内容は必ずしも明白ではない。二人の不幸がその生い立ちに起因するとしても、それぞれの内実が具体的に描写されているとはいえないからだ。「恋」というなら、それなりの要件が必要であるが、ここにはそうした切実な相互性は感じられず、少年と少女の心は不透明なままである。

私は、ここに作者の私的な背景が忍び込んでいるのではないかと推測している。すなわち、「火傷のひきつれ」という言葉は、ケロイド状の傷の外見や疼痛と同時に、内面的なトラウマを連想させる。伝記作家である鶴羽信子によれば、曽野の父親の暴力やモラルハラスメントはその幼少期に暗い影を落としており、曽野自身も、小学校の高学年の時に、母親が自分を連れて自殺しようとしたという経験を語っている（「親は『人』でない」『仮の宿』39 頁）。

しかし、かりに少女の「私怨」がいかに切実なものであったとしても、少年のそれと同列に扱うことはできない。そもそも少年は私怨、公憤ともに奪われている存在である。語り手は、「具志堅健次」から社会的な文脈を排除することによって「楽園のアダム」を創造した。少年に「吃り」という〈聖痕（スティグマ）〉を与えた上で無力化し、「まる裸」で地上に放りだした。ここにあるのは、「日本」による〈沖縄〉の脱―主体化という事態の暗喩そのものであり、「琉球処分」以来の植民地的な構図の反復である。

今でも「本土」を「内地」と呼ぶ沖縄には、身内と他者の顔が交錯している。曽野の場合で言えば、地底深くマグマのように燻り続ける戦争トラウマに向き合う覚悟も準備もないまま、「身内」としての同情と憐憫で沖縄にかかわり、「他者」としての沖縄の顔に激しく抗議されて「逆切れ」したというところだろうか。

ただし、私がここで問題にしたいのは、曽野の政治意識や私的な信条そのものではない。より重要なのは、曽野における〈日本人〉という無意識に対する徹底した鈍感さであり、「沖縄人」という独自の経験（アイデンティティ）に対する無知である。これは曽野個人のみならず、われわれ〈日本人〉全体の後頭部に突きつけられた問いである。

「公憤」として現れる沖縄の言説など氷山の一角である。沖縄戦を経験した人々の「日本軍（ジャパニー）」への私怨なら掃いて捨てるほどあるだろう。「ジャパニー」とは「沖縄出身でない日本兵」のことであり、県民の「本土出身の日本兵」に対する強い怨みと侮蔑を表す沖縄製のスラングである。こうした住民感情はふだんは表面化しないが、戦中戦後の沖縄県民にとってはむしろありふれた経験だった。

1971 年の『潮』の特集「沖縄は日本兵に何をされたか―生き残った沖縄県民 100 人の証言」[28]などはその一端である。ここには日本兵による住民への数々の加害行為がほとんど 100 名全員の口から証言されている。証言者の一人である浦崎純氏の言葉通り、沖縄戦は「中央統率部の非情な作戦計画と、配備された将兵の対沖縄への差別と偏見の中で戦われた戦争」であり、県民はまさに「腹背ともに敵中におかれていた」のである。曽野の沖縄戦関連のテクストには、こうした認識がみごとなまでに抜け落ちている。

大城立裕の小説には、敗戦直後の米軍の収容所で生き残った「日本兵（ジャパニー）」に石を投げる少年の話が出て来る。米軍の捕虜収容所では大人たちが「ジャパニー」を袋叩きにすることもあったらしい。本来なら「星と魚」の〈具志堅健次〉は、彼らの末裔の一人でもあり得たはずである。

「星と魚の恋物語」を書き上げた翌年の春、曽野はふたたび赤松隊の戦友会に姿を現す。同年 5 月の『青い海』に掲載された赤松の手記[29]の中にはこの時の写真が掲載されており、端の方に曽野の姿も見える。キャプションには「つい先頃、名古屋で沖縄の召集兵も交えて旧隊員が旧交をあたためた。取材中の作家・曽野綾子さん姿もみえる」とある。

その年の夏、曽野は「ある神話」の取材のために渡嘉敷に向かい、9 月に「切り取られた時間」を書き下ろすことになる（曽野によれば、「ある神話」の取材を進めているうちに「切り取られた時間」（1971 年 9 月）の構想が浮かんだという）。この作品はキリスト者における戦争というテーマに曽野が正面から取り組んだ小説である。

このとき曽野は、すでに初めての「宗教小説」（1967 年）とされる 1227 枚の長編「無名碑」を書きあげ、さらにアウシュビッツで殉教したコルベ神父の取材を併行して進めていた。いわば、「カトリックの隅っこ」から「キリスト教文学者」としての「確信」へと至る途上の時期である[30]。

おそらく、曽野にとって「沖縄」を書くことは「キリスト者作家」としての使命であり、神

28 『潮』1971 年 11 月号。
29 『神の木偶―曽野綾子の魂の世界』前出。
30 曽野綾子「カトリック小説のむずかしさについて」（『文学と倫理』春秋社、1958 年）

の試みと感じられていたのだろう。ここでは、先述の中西昭雄の言葉が想起される。すなわち、曽野は「カトリシズムの人間観を披歴するに格好な素材をさがしていて、それとして沖縄戦を選んだのではなかったか」[31] という仲西の第一印象はあながち間違っていなかったことになる。

しかし、「星と砂」の少年と少女が出会うことはなかった。二人の「傷 / トラウマ」が〈癒着〉するはずがない。そもそもそのような特権的な場所は存在しなかった。仮にそれが信仰という超越的な場所だったと仮定しても不可能である。ここにおいて作家内部の切実さ、使命感は空転し、独善となる。

ここにあるのは「宗教的寓話」というより、通俗的な沖縄イメージをなぞっただけの陳腐な恋物語であり、植民地的なツーリズムの変奏にすぎない。あるいは「星と砂の物語」は、「沖縄」と出会うことを切望しながら失敗した無惨なテクストだったと言えるのかもしれない。

※本稿では「星と魚の恋物語」と同時期に書かれた「甘酸っぱい部屋」についても考察する予定だったが、紙幅がつきた。稿を改めたい。

31　中西。前出。